

1 岐阜巨版 第26512号 (昭和17年8月1日第3種郵便物認可)

71年前の8月6日、広島市に原爆が投下された結果、家族6人全員が亡くなった一家のスナップ写真が、同市の原爆資料館の新着資料展で展示されている。爆心地近くで理髪店を営んでいた鈴木六郎さん(当時43)が家族を撮影した。白黒の写真が、幸せな一家をこの世から消し去った悲劇を今に伝えている。(社会部・安福晋一郎)

## あす広島「原爆の日」

●新着資料展の案内欄に使用された一枚。英昭君と公子さんが人形で遊ぶ。1939年。●公子さんと英昭君で食べ物を与えるフジエさん。1940年。いずれも鈴木六郎さん撮影(恒昭さん提供)



鈴木六郎さん

人形を手に仲つまつまじく遊ぶ。ぶきょうたい、まな娘の口に食べ物を運ぶ母。六郎さんのおいの鈴木恒昭さん(八三)は、広島府中町(一〇一四年、写真の一部約七百枚を資料館に寄贈し、そのうち十五枚が十一月までパネル展示されて

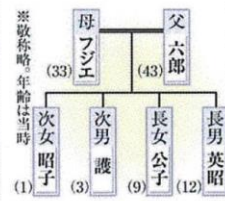
# 全員犠牲 一家命の証し

いる。写真の説明文には「一家全滅」と記されている。恒昭さんによると、六郎さんの長男英昭君(当時二歳)を背負い、近くの救護所に逃



げたといつ。助けを呼ぶため別れたきり、公子さんは死亡。親戚宅に避難した英昭君も、大量の鼻血と胸毛で一週間後に亡くなった。爆心地から五百メートルの自宅にいた六郎さんについては、約一月月後、郊外の救護所の名簿に「重傷後死」とあ

## 資料館に父の撮った写真



た。次男謙ちゃん(同)と次女昭子ちゃん(同)は自宅の焼け跡から白骨で見つかったという。妻フジエさん(同)は重傷を負い美家に引き取られたが、ほかの家族全員が犠牲になったと聞き、半狂乱となって井戸に身を投げ、自ら命を絶った。恒昭さんは「何のために生きてきたのか、ふびんでたまりません」と涙ぐむ。恒昭さんは二つ年下だった原爆で全員が犠牲になった鈴木さん一家

英昭君と仲が良く、原爆投下の前日も一人で川遊びをして、エビや貝をとった。六郎さんは、口数は少なかったが子供は、口数は少なかったが子供たちに向けていた。海水浴や旅行によく出掛け、家族の日常を切り取っていた。六郎さんが撮りためた写真は、被爆前に親宅に預けて消失を免れたとみられ、その後、恒昭さん宅の押し入れで保管されていた。アルバム約二十冊分、一千枚以上になる。

資料館の新着資料展の案内看板には英昭君と公子さんが人形で遊んでいる写真が使われ、オハマ米公積額が五月に訪れた際、館内の一階にも置かれていたとみられる。恒昭さんは「横目で見ただけですけど、自分の国が落とされた爆弾が幸せな家族を奪った事実を、きくと感じてもらえたと思う」と話した。